



上/万年橋。峡北地方では初めて建造されたコンクリート製の橋。
下/藤村式の旧津金学校校舎。現在は須玉町歴史資料館となっている。



過ぎると間もなく左側に「味噌なめ地蔵」がある。体の具合が悪いところ、地蔵の同じところに味噌を塗ってお祈りをすれば、病気が治るといわれたのが名前の由来なのだそう、その歴史は古く武田信玄の時代までさかのぼる。地蔵に塗られた真新しい味噌が、昔も今も健康を願う思いを伝えているよつである。

その先で道は二手に分かれ、左が「小諸・清里」方面(佐久往還)、右に進めば「浅川・津金」方面(佐久道)となる。今回は佐久道をたどる。のどかな田園地帯を過ぎ、分岐点から50分ほど歩いたところ、分岐点に導かれて着いた「遠照寺」の門前では、巨大な二本のアカマツが迎えてくれる。この松は「鶴亀の松」もしくは「夫婦松」とも呼ばれている。またこの寺の境内には「お葉つきイチヨウ」といわれ、一つの葉に二個の実が付く珍しいイチヨウの木がある。

さらに須玉川沿いの道を進むと、徐々に両側の山が迫り、道のつきあたりを右折して須玉川を渡る。橋は「万年橋」という。昭和七年に架けられたこの橋は、峡北地方で初めて建造さ

れたコンクリート製の橋だそう、完成当時は近隣からの見物客でにぎわったとのことである。橋は、今も歩行者用として残されている。その先、道はしばらくこう配がきつくなるが、覆う木々がつくり出す空気と木陰に気持ちよくなつてしまふ。曲がりくねった道を過ぎ、津金地帯に入る。急に視界が開ける。空が大きく広がり、山あいに広がる田園風景が変わる。旧津金学校を利用した「須玉町歴史資料館」には、明治八年に建てられた藤村式校舎(擬洋風建築)をはじめ、大正、昭和と三代にわたる校舎が復元されている。幼いころに胸に抱いていた志、遠くに離れ

た友の顔、そんなことを思い出させてくれる優しい空間が、ここにはあるように思える。息を整え、再び先へと進む。集落を離れ、道はいよいよこう配を増し、海岸寺の山門へと入っていく。資料館から50分くらい歩いたところ、標識がなければ気付かないほどの静寂の中に「海岸寺」があった。境内にある石仏群や江戸時代の名工により建てられた観音堂が、訪れる人を静かに迎えてくれる。さまざま歴史の面影を残す佐久道は、この先峠道を越えて浅川の集落へと続いて行く。道の終着となる佐久はまだるか遠くである。

山梨の旧道を訪ねて

一道一会

北杜市/佐久道(佐久往還)

甲州と信州の佐久を結ぶ佐久往還。今回は、途中若神子から分岐し津金、海岸寺峠を越える「佐久道」とも呼ばれた道を歩いた。

甲州街道道草崎から若神子、長沢を通り信州佐久方面に向かい、中山道へと通じる佐久往還。古くは信州攻略の軍用道路として、後に交易の道路としてにぎわった道である。今回は、大豆生田から、海岸寺峠までを歩くことにした。海岸寺峠までは約15kmの道のりで、歩いて行くにはかなりの距離である。しかしながら先人達は、この道を一步一步自分の足で歩いて行ったのである。国道一四一号「桐の木橋」交差点から旧国道(現国道六二二号)へと分かれ中央自動車道と立体交差するところに「大豆生田のヒイラギ」がある。江戸時代の終わりのころに天下太平国家安泰を願って建てられた、「題目大宝塔」の背後にあるヒイラギは、幹囲三・五メートル、高さ七・七メートルもある巨木である。解説板には、ヒイラギの葉は歳を重ねるほど葉からトゲが消え丸くなっていくと書かれていて、どこか人間の一生にも通じるところがある。道は緩やかに上り街中に入る。左手に旧須玉商業高校、現在の北杜市庁舎を見ながら歩くと築80年余りを経過した「水上写真館」がある。木造2階建の写真館には、木製の看板が掛けられ、ガラス越しに飾られた写



味噌なめ地蔵。塗られた味噌が、癒やされることを願う思いを物語る。